

TOBU

私たちは、
医療を通じて
いのち
生命を守ります。

2018
FEB
冬号
vol. 21

済生会横浜市東部病院広報誌



【特集】

がんと付き合っていく時代へ やさしいがんの話

TAKE FREE

ご自由にお持ちください



社会福祉法人 SAISEIKAI YOKOHAMASHI TOBU HOSPITAL
済生会横浜市東部病院

【CONTENTS】

リーダーたちが語る東部病院の医療

〔vol.12〕 患者さんの想いを見据え、
チーム力で集中治療に取り組む

集中治療センター長・集中治療科部長 高橋宏行

〔診療科紹介〕 東部がんセンター

がんを受け入れて まわりの人にも話して がんと共存するような気持ち

日本人の2人に1人は生涯のうちにがんになるといわれる時代。
がん患者さんたちは今、どんな思いでがんにつき合っているのでしょうか？
現在、東部病院でがん治療を受けている因幡さんにお話をうかがいました。



因幡哲也さん
53歳
横浜市鶴見区在住

毎日コツコツとできることをやってみよう

がんを発症してから 現在までの経過は？

がんがわかったのは昨年の6月です。腹痛で外来を受診し、調べてもらったら大腸がんといわれ、すぐに手術。その時に一時的な人工肛門をつけました。さらに詳しく調べ、数日後にステージ4（注）と告知されました。肝臓にも転移があったので、昨年の11月にはその切除手術も行い、今年の1月の初めに人工肛門を閉鎖しました。これから検査して大腸に問題がなければ、来月から抗がん剤治療を始める予定です。

がんと告げられた時は、やっぱりそうかという感じでした。それまでも腹痛や血便があったので、自分でも何かあるとは思っていたんです。実は以前、検診を受けて要再検査と言わ

（注）ステージはがんの進行度を示す言葉。ステージ0期～4期の5段階に分類され、4期が最も進行している状態。

治療中に困ったことや 今、気をつけていることは？

困ったことは特にないかな。人工肛門も慣れればすごく楽で、今はストーマ（人工肛門）用の公衆トイレも結構ありますから、外出にも困らないし、お風呂も全然平気です。
治療費のことはちょっと心配で、病院のソーシャルワーカーさんに相談したら、高額療養費制度の利用の仕方とか役所のシステムとかを教えてもらってすごく参考になりました。家族が不安がって話を聞いてもらう時もありました。そういう風に患者本人だけでなく、家族を含めた周りのケアをしていただいたのは大きいですね。

がんという病気について どのように考えていますか？

最初はやっぱり不安はありましたよ、死んじゃうのかなって…。でも主治医と話して治療を進めていく中でよく考えたら、結局人間は最後は死ぬんですね。例えばもうダメかもしれないって言われたとしても、戸惑いはするけど最終的には受け入れると思うんです。だから毎日コツコツとじゃないですけど、できることをやってみようって考えです。

昔はがんの告知自体しなかったけど、今はステージいくつ生存率何パーセントまできちんと伝える時代になった。でもこういう治療があるといった説明があるので、それは良いことだと思う。がんになったら終わりじゃなくて、がんと共に生きていく考え方もあると思うんです。だから自分にとってがんは大きな病気の1つ。もともと楽観的な性格だし、悲壮感はありません。



がんに対する考え方は人それぞれ。
100人のがん患者さんには100通りの
がんとの付き合い方があります。自分
らしい付き合い方を考えていくこ
とができればいいですね。

患者さんやご家族の話を聞くことから

家族や地域、みんなで支えていく



がんになったら体のことだけでなく、暮らしの変化による困りごと。生活に不安があっては治療に専念できません。そんな時、頼りにしてほしい「患者相談窓口」をご紹介します。



患者さんやご家族の「困った」に院内外と連携して応えます

困りごとを抱えている患者さんやご家族のご相談に乗り、問題の解決に向けて支援するのが「患者相談窓口」。患者相談窓口には、がん専門看護師やソーシャルワーカー、退院調整看護師が在籍しています。具体的には患者さんが元の生活に戻るための調整、経済面での問題の解決の手助け、治療上の悩みや不安に対するアドバイスなどを行っています。さらに自宅に帰ってからも安心して在宅生活を過ごせるように、区役所や訪問看護師、ケアマネジャーの方々と密接な連携をとり、患者さんの情報共有を図ることも大切な仕事です。

仕事は続けられる？

治療費は払える？

在宅で療養できる？

会社へどう説明したらいい？



患者さんが持つ不安

抗がん剤の副作用ってどうなの？

気軽に相談できる場所があることをしてほしい

相談窓口のスタッフは、すべての患者さんに介入するわけではなく、病気になって今までの日常生活を送るのが難しくなった方に関わらせていただくことが多いです。院内の医師や看護師から、この患者さんが心配だから話を聞いてあげてほしいと依頼されるケースもあれば、直接患者さんやご家族が来られるケースもあります。

相談内容は様々ですが、がん患者さんの特徴としては治療期間が長いことから経済的な悩みが多く、経済事情を詳しくお聞きした上で利用できる制度をご紹介します。「プライバシーに踏み込むことになりますが、状況が把握できない

と支援の計画が立てづらいので、何でも話していただけるとありがたいですね」と話すのはソーシャルワーカースタッフ。

「また、がんは予測がなかなか難しい病気ですので、漠然とした不安を訴えられる方もたくさんおられます。ほかにも困った時のために今のうちから知識をつけておきたいという方や、家にいる家族の介護を心配して相談に来られる方もいらっしゃいます。そのすべてを解決できるとは限りませんが、知り得るあらゆる社会資源を使って、一緒に解決の糸口を探っていくのが私たちの務めです」。

医療費はどれくらいかかるんだろう？

自分は何をしてあげられるの？

元の生活に戻るために利用できる制度は？



看病の不安やストレス、どうしたらいい？

家族が持つ不安

患者さんと同じ視点で患者さんの価値観を大切にしながら支えたい

患者さんの「語り」からその方の背景、価値観・らしさを的確にとらえ、正確にスタッフに伝えるのも相談員の大切な仕事。患者さんの語る言葉はどのような気持ちから発せられているのかを十分に理解することで、より患者さんに寄り添った援助が可能になります。

「がんのこと、誰にも伝えられない」「親ががんになったことを子どもに伝えても大丈夫なのか、どうやって伝えたらいいのか」。そういったご相談には、当院の臨床心理士やチャイルド・ライフ・スペシャリストと一緒に考え、患者さんに最適なアドバイスを見つけ出します。



ご家族も1人で悩まないで、まずは話すことから始めましょう

患者さんと関わる時は、ご本人だけでなくご家族や患者さんと近い関係の人となるべくお話をさせていただくようにしています。何度かお話しをしているうちに患者さんが相談窓口のスタッフには見せなかった一面を知る事ができたり、ご家庭の状況をより深く理解できるようになったりするためです。それにより、ご本人の生き方や価値観を大切にしながらより良い支援をさせていただくことができます。

また、ご家族も患者さんと同じように様々な悩みを抱えておられます。その一つ一つに丁寧に耳を傾け、固定した価値観を押しつけないことが大切です。私たちの仕事は医療の枠を超えているかもしれませんが、本人の意志を最大限に尊重することに支援の本質があります。

1人で問題を抱え込んでいては、解決の道は開けません。まずは、どんな些細なことでも話すことから始めてください。

東部病院のサポート

▶ がん相談支援センター

来院またはお電話でがんに関する様々な相談に応じ、適切な情報を提供します。がん患者さんおよびそのご家族、当院に通院されていない方のご相談もお受けいたします。



患者相談窓口 がん相談支援センターへのご相談・お問い合わせは

▶ がんサロンさんぽ道

がん患者さんやご家族同士が病気のこと、生活のこと、将来のことなどについて悩みや体験を語り合う交流会です。開催日は当院ウェブサイトでお知らせしています。



TEL : 045-576-3000 (代)

LEADERS

リーダーたちが語る東部病院の医療

東部病院を牽引するリーダーたちの姿・人柄・取り組みに迫ります。

vol.13

集中治療センター長・集中治療科部長

高橋 宏行

患者さんを元気にして戻す
その過程が集中治療の楽しみ

東部病院4階の集中治療センター（ICU）は、内科系・外科系を問わずあらゆる患者の集中的治療・管理を行う施設だ。

ここでは専従の医師とスタッフが24時間体制で心電図や血圧、呼吸の状態をモニタリング（観察）しながら診療に当たっている。10床を有するセンターは広々としたスペースにベッドが配置され、意外なほど穏やかな空気が漂う。

「テレビドラマのイメージなのか、ICUと聞くと瀕死の大変な患者さんが入るところと思われる方が多いですね。このICUは術後の患者さんが6〜7割なんです。手術を受けた後に来て、1、2日ほどで一般病床に戻られます。センター長の高橋は語る。

「あとは病棟急変の患者さん。入院して容態が悪くなり、一般病床で診るのが難しくなった方です。そういった方たちに集中治療のノウハウを投入して最終的に元気になるって戻っていただく。その過程がこの仕事の醍醐味、おもしろさと言えるかもしれません」。

医師を志したきっかけは
幼少期の医師の記憶

東部病院の開院以来、センターをけん引してきた高橋は、東京の赤羽出身。服飾店を営む父の下で育ち、工業高校の電気科から医学部へ進学という経歴をもつ。

「子どもの頃は体が弱く、喘息のため、幼稚園時代は医院で吸引を

していた記憶しかありません。

毎日のように通った医院。苦しい時に面倒を見てくれたお医者さん。この記憶は高橋の心に残り続け、医師を志すきっかけとなった。勉強の傍らアイスホッケーに没頭した医学部時代を経て、卒業後は大学病院の麻酔科に入局。

「その頃大学にあったICUを見て、こういう仕事もあるんだって興味を持った。それで麻酔科の先生の下で勉強しているうちに、だんだんおもしろくなったんですね。以来、麻酔の仕事とICUの仕事、さらに救急の仕事に携わり、経験を重ねていく。そんな高橋に、新しくできる東部病院で集中治療をやってみないかと声がかかったのは、2007年のことだった。

最初は理解されなかった
先駆的なICUのシステム

高橋が東部病院で目指したのは、「グロースドールICU」と呼ばれるシステム。集中治療専任医が常駐し、患者さんを主治医から預かって24時間管理する。いわば「重症患者管理のプロフェッショナル集団」だ。こうした形態のICUは、日本ではまだ多くないという。

「世間一般でも集中治療科というのはなかった頃ですから、最初は病院の中でもなかなか理解されなくて、受け入れてもらうまで時間がかかりました」。

一つ一つ結果を積み重ねていくことで、やっと評価が固まり出したのが5年目くらい。今ではほとんどの科から依頼を受け、患者さんを預かるようになった。人材の

育成も進んでいる。

「今ここにいる医師は1人を除いてみな公募で来てくれた人たちです。僕の目指していることに共感してくれるドクターたちが集まり、ここで集中治療の専門医の資格を取って帰っていく。その意味では、10年間頑張ったよかったと思います」。

次に起こることを常に
推理しながらやっていく

集中治療の楽しさであり肝とするとするのは「先を読むこと」だと高橋は語る。

「具合が悪くなったからこうするではなくて、次にこうなるからこういうことを準備しておこうとか、この疾患だったらこの後こういうことが起きるだろうと推理しながらやっていく。実はこれは、手術中の麻酔の管理と共通することでもあるんです」。

もう一つ、高橋が集中治療に必要と考えるのはチームワークだ。「患者さんが回復していく過程で、いろいろな職種の人々がチームで関わっていく。特に今ICUには単に救命するだけでなく、いかに元の生活のレベルを落とさないで返すかが求められています。食べられていた人が食べられる、歩けていた人が歩けるようになるには、リハビリの人や管理栄養士などがチームに加わる必要があります。そうした人たちにサポートしてもらうことがなければ、最終的なアウトカムは出せないと思います」。

スタッフの士気は高く、集中治療に対してベクトルが同じ方向を

向いている。それが患者さんの速やかな回復につながっている。

高齢化に向かう社会で
この先のICUの役割とは

10年をかけて、高橋は東部病院の集中治療の基盤をつくった。今後取り組んでいきたいことは何だろうか。

「技術の進歩で、これまでは手術を受けられなかった高齢の方にも手術を提供できるようになってきています。手術は日常生活を改善させるものです。高齢の方が安心して手術を受けられるように、術後管理をサポートしていきたいですね。東部のICUにはその使命があると思っています」。

高齢者といえば、終末期の問題も避けて通れない。

ICUに来る患者さんの中には、回復が見込めない人も少なからずいる。これは、集中治療をやっている辛い時だ。

「人工臓器をつければ、延命はできるんです。ご本人がどう望んでいらしたのか、「延命」と「救命」は違います。これは本当に正しい治療なんだろうかと葛藤があります」。

高橋のみならず、これから誰もが考えていかなければならない大きな課題といえるだろう。

長年ICUに携わって今、高橋が感じるのは予防医療の大切さ。「既往歴は手術、集中治療に影響を及ぼします。普段から自分の体に目を向けること。それを少しでも多くの人に伝えていければと思います」。

常に先を読む力とチーム力
集中治療で患者さんを元気にしたい

集中治療の専門医となった理由

「循環動態や呼吸器管理は工業高校時代に勉強した電気工学に似ているな」と思っていた。循環器や呼吸器の分野に興味を持ち始めたことから、麻酔科を選び、現在の集中治療科へと繋がっている。

高橋 宏行

Hiroyuki Takahashi

済生会横浜市東部病院

集中治療センター長・集中治療科部長

東京都出身。1993年獨協医科大学卒業、同大学病院麻酔科入局。同大学病院と東邦大学医療センター大森病院の勤務を経て2007年東部病院開院に伴い集中治療科部長に就任。日本集中治療医学会専門医、日本麻酔科学会専門医、日本救急医学会専門医。

毎朝10時半には一人ひとりの患者さんについて多職種でカンファレンスを行い、その日の治療方針を確認する。



NEWS & TOPICS

青あざのレーザー治療が受けられます



当院皮膚科では、青あざと呼ばれる「太田母斑」「異所性蒙古斑」及び「外傷性色素沈着症」を対象に最新の機器を用いたレーザー治療を行っています。施術は専門的な知識と豊富な治療実績を持つ医師が担当いたします。青あざの部位や濃さによって、早めの治療が望ましいケースと経過観察でよいケースがあります。治療のタイミングで迷われている方も、専門医が適切な診断をさせていただきますのでぜひ一度ご相談ください。

- 対象は生後1か月の乳児から成人まで。
- すべて保険診療、完全紹介制です。



アレクサンドライトレーザー Alex II

受診方法 他医療機関からの皮膚科宛の紹介状をご持参の上、平日8:30～11:00に総合受付へお越しください。

「ロボット手術センター」を1月より開設

当院では2012年11月に横浜市内で初めて手術支援ロボット『ダヴィンチ (da Vinci Surgical System)』を導入し、前立腺がんの手術を始め、胃がん、子宮がん、腎臓がん、膀胱がんなど多くの領域でダヴィンチ手術を実施してまいりました。この実績を踏まえ「ロボット手術センター」を開設。より質の高い手術を多くの皆様に提供できるよう努めてまいります。



済生会東神奈川リハビリテーション病院オープン

本年2月、神奈川区に済生会東神奈川リハビリテーション病院が開院しました。回復期リハビリテーションに特化した専門病院として97床を有し、神奈川県屈指の規模を誇るセラピストと多数のリハビリ専門医、国内最先端を行く充実したリハビリ機器と設備をそろえています。同じ済生会グループの当院ならびに神奈川県病院（神奈川区）と連携を図りながら、横浜市東部地域における良質な地域完結型医療の実現を目指してまいります。



JR東神奈川駅、東急東横線東白根駅よりいずれも徒歩5分とアクセス至便。

INFORMATION

市民公開講座 「慢性腎臓病のはなし」

腎臓のしくみ・働きと腎臓病について、また腎臓病患者さんの食事や薬、透析と移植についてお話しします。

3月10日(土) 午前10:00～12:30(開場9:45)

【会場】 済生会横浜市東部病院多目的ホール(3F)
【お問い合わせ】 045-576-3000(地域医療連携室)
※予約不要・当日直接会場へ・参加無料

がんの悩みや不安、どうつき合えばいい？ 緩和ケア教室開催！

がんのつらさは身体的な不調だけではなく、がん患者さんやご家族は、がんが告知されたとき、治療の過程、あるいは再発や転移がわかったときなど様々な場面で悩みや不安を抱えます。「緩和ケア」とはがんに伴う、こうした体と心の痛みを和らげ、その人らしさを大切にするという考え方です。東部病院のがん診療では、緩和ケアを治療の一環として

て、早期からいろいろな職種のスタッフが協力し、がん患者さんやご家族のサポートをしています。また、緩和ケアについて知っていただくために、当院にかかられているがん患者さんとご家族を対象とした「緩和ケア教室」を定期的に開催しています。各分野のスペシャリストがわかりやすくお話しいたしますので、ぜひお気軽にご参加ください。

第1部

3月5日(月) 14:00～15:00

「緩和ケアについて」医師
「がんの痛みとうまく付き合うために」薬剤師
「がんとりハビリテーション」理学療法士・作業療法士

第2部

3月19日(月) 14:00～15:00

「緩和ケアと療養」看護師
「がん療養における心のケア」臨床心理士
「がんと栄養」管理栄養士

【会場】 済生会横浜市東部病院多目的ホール(3F)
【お問い合わせ】 がん相談支援センターまたは
医事企画室(代表:045-576-3000)まで。
※事前予約不要。当日直接会場へ。



診療科紹介

東部がんセンター

東部がんセンターは、今後この地域で増加が見込まれているがん患者さんに対し、より質の高いがん医療を提供することを目指して昨年10月に開設されました。がん診療では単一の診療科だけでは患者さんを十分に診療することができません。当センターは科目を横断した診療体制を基盤に、診断部門、情報提供・相談部門と密に連携をとることにより、がん患者さんご家族にとって最適ながん医療を提供します。新たに設置された「がん看護外来」では、早期から患者さんの様々な不安や苦痛に応じた緩和ケアを初診時から実施しています。



江川智久
Tomohisa Egawa
済生会横浜市東部病院
東部がんセンター長

》新たな提供サービス

がん看護外来

がん告知時に患者さんに納得して治療を受けていただくためのサポート、患者さんの不安や苦痛を聞き出し、適切なコンサルテーションやサポートを行います。また、治療中の心理的不安を軽減するための面接を行っています。



薬剤師外来

化学療法を受ける患者さんを対象に、抗がん剤の投薬、または注射の内容の説明、治療計画や副作用に対する説明などを行います。患者さんが安心して正しい方法で治療を続けていただけるようサポートいたします。



東部がんセンターは総合病院のがんセンターですので、各種がんに対し最新で安全最適な治療を受けていただけるのはもちろん、併存疾患をお持ちの患者さんも安心してがん治療を受けることができます。例えば入院中、または退院後の経過観察中や化学療法中に即治療が必要な状況に陥っても、24時間365日対応可能な救命救急センターの受診や24時間対応の手術、その後のICU(集中治療)での治療が可能です。がんの治療方針は病状に応じた複数診療科のカンファレンスで決定し、決して主治医の独断で勝手な治療が行われない体制になっています。手術が必要な患者さんは、当院が誇る周術期支援センターを受診いただき、手術に関わるすべてのことを評価、管理し、安心・安全な手術を実現しています。そのほかにも化学療法が必要な患者さんに対する時間をかけた丁寧な説明、がんの告知や治療に伴う不安の傾聴、軽減、経済的な問題や就労の支援、セカンドオピニオンの紹介など様々な問題に初診時から多職種のスタッフがきめ細かく対応し、患者さんご家族をトータルにサポートしていきます。